館山市立博物館

特別展「房州と江戸・東京―海を行き交う人・モノ・文化―」

開催期間：平成３１年２月２日（土）～平成３１年３月１７日（日）

【企画展の内容・目的】

■海に囲まれた房州（千葉県南部）が、観光、流通、教育、文化、信仰など多様な面で江戸・東京と双方向の関係を有しており、そこに果たした海の役割が大きかった点を紹介し、当地域における海の重要性を学ぶ機会とした。

■講演会・解説会によって展示内容や趣旨を分かりやすく解説することで、「海の学び」の理解を促すとともに、参加者が歴史から現代の問題のヒントを得ることを目標として実施した。

■ワークシートやワークショップにより、子どもたちに海に囲まれた地域に暮らしていることを実感させ、海の存在や大切さを理解させた。

■観光、産業、教育など幅広いテーマを取り上げることにより、多くの参加者が身近な問題として捉え、主体的な「海の学び」につながることを目指した。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

１．企画展示の内容

■開催期間：平成３１年2月2日（土）～平成３１年3月１７日（日）

■開催場所：館山市立博物館本館　企画展示室

■入場者数：６，１８３人

館山市立博物館　外観

企画展会場　入口

展示冒頭の「１　海をわたる」において、江戸時代の地図により房州と江戸の位置関係を示した。これにより、房州が三方を海に囲まれており、江戸（東京）と行き来する交通手段としては海上交通が最も便利である点を視覚的に理解させた。

その上で、和船（押送船・五大力船）の模型を展示し、江戸時代の海上交通のようすを具体的にイメージさせた。また、明治時代に就航した汽船の写真も併せて展示することで、和船との構造の違いを観察し、船への興味・関心が生まれるよう工夫した。

このほか、地元の絵師が江戸時代に描いた和船のスケッチ図や、地元の船乗りが外国に漂流した古文書などを紹介した。これは、展示内容が遠い歴史上の事件ではなく、身近な地域のできごとであることを理解させ、興味・関心を持たせるための工夫である。

以上のように、展示導入部で海上交通を取り上げることにより、これら海上交通網の整備を土台として、次のコーナー以降で取り上げるさまざまな交流・行き来が生まれたことを理解させた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

「２　観光地・房州」では、江戸時代から明治時代に房州が観光地としてどのような魅力を持っていたのかを海との関わりから紹介した。まず、房州を描いた名所絵を展示し、海の風景が房州を代表する名所として受け入れられていたことを視覚的に理解させた。次に、江戸時代の旅日記や道中記により、海の幸も当時の旅人の楽しみのひとつだったことを示した。さらに明治時代の観光案内を展示し、当時の房州が気候温暖の「避暑・避寒の地」としてPRを行っており、海水浴ができることも魅力のひとつとなっていたことを示した。

以上により、江戸時代から明治時代を通じて、観光地・房州にとって海が果たした役割の大きさを実感させ、自らが暮らす地域において、海の景観を守り伝えることの大切さを伝えた。また、現代の観光資源や産業について考えるきっかけを提示した。

「３　産地と問屋」では、房州と江戸（東京）との商品流通を取り上げた。まず、明治初めの千葉県の漁業について記した『房総水産図誌』（国文学研究資料館蔵）や、江戸時代の鰹節産地ランキングである「かつほぶし位評判」（東京都立中央図書館蔵）により、当時の房州を代表する産物である鰹漁と鰹節生産を紹介した。これにより、海の恵みが房州の商品流通において重要な役割を占めていたことを理解させるとともに、現代の漁業や特産物についての主体的な学びのきっかけを与えた。

また、鮮魚の出荷先となる江戸の魚河岸を描いた絵画資料を展示することで、海を介した流通の現場や当時の人々の営みを具体的にイメージさせ、興味関心を持たせた。

さらに、明治時代の房州の商家外観を描いた版画を紹介し、汽船就航による東京からの商品仕入れについて説明することで、海上交通の進化によって町や産業が変化したことを理解しやすくした。

「７　移り住む人々」では、房州から江戸、あるいは東京から房州へ移り住んだ人々を取り上げた。明治時代の鏡ヶ浦（館山湾）周辺を描いた図により、都市部の実業家や政治家の別荘があったことを視覚的に示した上で、当時の移住者の意見を表で紹介した。明治・大正期の移住者は、房州を選んだ理由として、気候が温暖で、人々が素朴というもののほか、海の景観の美しさや、海水浴ができ保養となるなど、海との関わりを挙げている人も多い。また、「長く海上生活をしていたため、引退後の地も海のある房州を選んだ」という海軍軍人の声もあった。現在の房州も移住者が多いことから、これらの意見を現代と比較し、外から見た「房州の海の魅力」を再確認できるよう工夫した。

【来館者の声】

◯地域の暮らしを成立させる産業としての「海」と、人々に安心や心のゆとりを与える観光資源としての「海」という両側面を学んだ。

◯海上交通の発展に伴い、人・モノ・文化の交流が盛んになり、観光地房州の価値が高まったことを知った。今後もこの立地を生かして観光地としての地位を高めてほしい。

◯海は海路に限らず万物を育むものである。子孫のため今一度、きれいな海を守っていきたい。

◯海は人をつなぐものであり、互いに交流することがレベルの高い地域性を育てることを学んだ。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

２．関連事業の内容

■講演会

【開催日時】平成３１年2月2日（土）１３：３０ ～ １５：３０
【開催場所】館山市立博物館本館　集会室
【参加者数】１２４人
【実施内容・目的】

●特別展の内容を補足し、とくに江戸時代の海上交通と地域産業との関わりについて理解を深めるため、落合功氏（青山学院大学経済学部教授）による講演「近世の房総―特に安房、交流と地域―」を行った。

●房州と江戸を中心に、江戸時代の海上交通について分かりやすく説明した上で、海難事故と救助体制について具体的事例をもとに解説した。

冒頭の館長あいさつ

講演会会場入口

講師の落合氏

近世から近代の地域経済や商品流通に詳しい講師を迎え、展示だけでは理解が難しい、当時の日本における海上交通の全体像について分かりやすい説明を受けた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

東北から江戸へ向かう東廻り航路の説明を受け、房総が風待ち湊や緊急時の寄港地として重要な位置にあったことを学んだ。参加者は熱心に聞き入り、メモをとるなどしていた。

江戸時代の海難事故と救助について、実際の事例をもとに説明があった。身近な地名が登場することから、参加者は興味深く聞いていた。質疑応答では、かつて船に乗っていた方や、幼い頃に外国船が遭難したのを見たことがある方などから、自らの経験をもとにさまざまな意見や感想が寄せられ、参加者が歴史をヒントにして主体的な海の学びにつながっているようすが見られた。

【来館者の声】

◯安房の地域は海を活用して古来から発展してきた。今後も海を活用し、東京に近いという利点をいかすことに発展のヒントがある。

◯海に囲まれた館山の歴史をもっと学びたいと思った。

◯海というと観光や自然の面が目立つが、海や港・湊の歴史をしっかり学ぶことがこれからますます重要になってくると感じた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

■解説会

【開催日時】平成３１年2月１６日（土）１３：３０ ～ １５：３０
平成３１年3月2日（土）１３：３０～１５：３０
【開催場所】館山市立博物館本館　企画展示室
【参加者数】２８人・２５人
【実施内容・目的】
●担当学芸員が展示室を一緒に周りながら、見どころを解説した。同内容で２回実施。
●企画展の趣旨や全体の流れを示した上で、個々の資料から読み取れる情報や背景となる社会状況等を分かりやすく解説し、さらなる理解をうながす。

開催場所（企画展示室）

冒頭の説明

はじめに本展覧会の趣旨が、房州と江戸（東京）との双方向の関係を知ることで、両地域の交流をもたらした海の役割に注目するという点であることを説明。また、観光・移住や教育など、現代の房州を考える上で欠かせないテーマも多く取り上げているので、ここからヒントを持ち帰ってもらいたいことを伝え、参加者の主体的な学びを促した。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

それぞれの資料について注目すべきポイントなどを紹介した。例えば、押送船と五大力船の模型を見比べながら、船型の特徴や櫓の有無などの違いを観察してもらうとともに、積み荷の違いによる役割の違いを説明した。また、船の構造を理解した上で、絵画資料に描かれた押送船と五大力船を紹介し、より興味・関心がもてるようにした。

観光や交通など身近な話題については、現在の状況と比較することで、参加者が自らの問題として現代の海について考えるよう促した。例えば、房州の観光地として海の魅力が、江戸時代には眺望の良さや海の幸であり、明治時代には海水浴が加わっていったことを紹介し、現在の海の魅力や、そのためにすべきことについて自分なりに考えるヒントを与えた。

【来館者の声】

◯少なくなった海産物を守らなければと思った。

◯海を中心に江戸と房州の関係が幅広く知れて良かった。人々のいきいきとした生活が感じられた。

◯海は食を得て、足にもなり、また守りの場でもあり、日本中囲まれているので大変重要なものであると思う。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

■ワークショップ「海をめぐる旅オリジナルガイドブックをつくろう」

【開催日時】平成３１年3月9日（土）１０：００ ～ １５：００
【開催場所】館山市立博物館本館　集会室
【参加者数】２０人
【実施内容・目的】
●小学生をおもな対象とし、昔の人の気持ちになって海に囲まれた房州を旅する計画を立て、オリジナルガイドブックを作成する。
●ガイドブックの作成を通して、単なる知識の吸収ではなく、自らの視点で歴史事象を捉え、自分なりの発想で組み立てることを体験する。

開催場所（集会室）の様子

城山ふるさとまつりの一環として開催。
同会場には千葉大学のブースも

当日は会場周辺で城山ふるさとまつりが
開催され、にぎわっていた

城山公園で開催された商工会議所青年部主催のイベント「城山ふるさとまつり」に合わせて実施したため、博物館を初めて訪れる親子連れも数多く来館した。ワークショップの参加者は小学校低～中学年が中心だったが、未就学児も数名おり、企画展の理解が難しい年代の子どもたちにも、自分が暮らす地域が海に囲まれた土地であることを学ぶ機会となった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

会場には、房州の地図や名所絵、昔の旅の道具を用意し、参加者が自らの旅を具体的に想像できるよう工夫した。その上で、展示室内にも設置したワークシートを用いて、自分なりの旅の計画を立ててもらった。交通手段を徒歩・馬・船の中から選ばせ、経路を地図上に示すなど、現代とは異なる交通手段や、房州における海上交通の利便性などについて気づくきっかけを与えた。

参加した子どもたちは日頃から釣りや海水浴などで海に親しんでいるようすで、旅の行程にもこうしたレジャーを挙げていた。その他、「動物と友だちになる」「お母さんにおみやげを買う」のように自分なりの旅の目的を考え、それに応じた行程や持ち物を考えており、単なる知識の吸収ではない、主体的な学びを実践できた。

【来館者の声】※子どものため当日聞き取り

○もともと海が好きで釣りにもよく行くので、旅でも釣りをしたい。

○船だったらどんな持ち物が必要か、どこに行ったら良いか考えた。

○泊まる場所や食べ物など、昔はどうだったかな、と考えながら取り組んだ。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

【事業全体のまとめ】

本サポート事業を活用したことにより、これまで断片的に取り上げてきた房州と江戸（東京）との関係を、海という視点で総合的に紹介することができ、はば広い来館者の興味・関心を得ることができた。参加者からも「海を通じて歴史がつくられていることを学んだ」「海路が重要な役割を果たしていることが分かった」との声が寄せられた。

またサポート事業により、事前調査の上、他館から貴重な資料を借り入れることができたほか、広報も幅広く行うことができ、展覧会の規模・質ともに向上させることができた。

関連事業についても、講演会・解説会・ワークショップを実施することができ、企画展だけでは理解が難しい小学生から、展示で取り上げた内容をより深く学びたい来館者まで、さまざまな層に学びの場を提供できた。とくに講演会では、専門家を講師として招くことにより、企画展だけではカバーできない点まで理解を深めることができ、参加者からも「房総の海について初めてのことを多く知ることができた」などの感想が寄せられるなど満足度が高かった。

３．主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
１．ミュージアムサポーター絵図士	展示内容に関連した市内の史跡を紹介するイラストマップ３点を作成。展示室で配布した。
２．館山商工会議所青年部	創立６０周年記念事業として３月９日に城山ふるさとまつりを実施。博物館ではこれに合わせワークショップを開催し、相互連携を行った。
３．市内寺院	市内寺院が３月１４日に地域住民向けに開催した教室において、館長・学芸員が展示の見どころを解説した。参加者２０名。

４．主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
１．房日新聞	特別展「房州と江戸・東京」／あすから３月 17 日まで／初日は大学教授講演も（平成 31.2.1）
２．読売新聞（千葉版）	房州と江戸の関係多面的なテーマで／きょうから特別展（平成 31.2.2）
３．南房総生活情報誌クリップ 457 号	平成 30 年度特別展／房州と江戸・東京―海を行き交う人・モノ・文化―（平成 31.2.9）
４．千葉日報	房州と江戸の関わり紹介／館山市立博物館で企画展（平成 31.3.1）
５．毎日新聞（千葉版）	140 年前の「錦絵新聞」／館山市立博物館特別展で展示（平成 31.3.16）

以上

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。